



Shin-Kobe 漢方薬だより

10月号 (Vol.3)

更年期障害と漢方

40～50代の女性ならば体調が思わしくないと、更年期症状じゃないかと心配ですね。「更年期」とは閉経の前後5年間、合計10年間を指します。日本人女性が閉経をむかえる平均年齢は50.5歳ですので、45～55歳くらいが平均的な更年期と言えます。

女性ホルモンは20～30代でピークを迎えますが、40代に入ると急激に低下してきます。このためにあらわれる症状を更年期症状、そしてその症状が日常生活に影響を及ぼすまでになると更年期障害と呼ばれます。

症状は多彩で、イライラ、不安感、不眠、抑うつ、無気力などメンタルの問題や、ほてり、のぼせ、汗かき、だるさ、頭痛、動悸、めまい、耳鳴り、肩こり、腰や関節の痛み、排尿やお肌のトラブルなどがみられます。

40～50代といえば家庭や職場の環境も大きく変わりやすく、ただでさえストレスにさらされる時期にホルモンの低下もあいまって症状が強く出やすいとはいええます。ただ女性ホルモン以外の原因が隠れている場合もありますので、血液検査でホルモンのバランスなどを調べたり、超音波検査などを行うことで診断します。

更年期障害の治療は、ホルモン補充療法や漢方薬があります。代表的な漢方薬は当帰芍薬散、加味逍遙散、桂枝茯苓丸などですが、症状や体質に応じて処方を決めていきます。当クリニックは漢方専門医と内分泌内科専門医が常勤していますので、一人ひとりに最適な検査や治療方法を相談しながら進めていくことが可能です。

なによりもまず体調がすぐれないときに更年期症状なのか、その他の病気なのか見極めることが大切です。

副院長：岡田 直己



糖尿病・内分泌・漢方内科 新神戸おかだクリニック

電話：078-241-1350